

専門演習2 「行動科学と計量社会学」

目的と日程

村瀬洋一
murase@rikkyo.ac.jp

1. 演習3年次の目的

- 1) 批判的精神を持ち、真実とは何か自分で判断できる能力を身につける
- 2) 討論、発表、文章の組み立て、調査実施、データ分析能力の修得
- 3) 論理的に考え、調査と分析により自分独自の成果を発表する能力の修得

2. 主な内容

- 1) テキストや学術論文をもとに発表と討論。知識の暗記でなく、学問の考え方を理解し、自分で理論や仮説を作ることを重視。また、研究の最新状況を把握する。
- 2) 情報収集法や発表法などの「仕事の進め方」、「知的生産の基礎技術」の全般的訓練
- 3) 各自が自分の興味関心にしたがってテーマを設定し、小研究（ゼミ論）を実施
既存の調査データを分析して発表と討論
- 4) データ分析結果の発表（重回帰分析、因子分析などの多変量解析の実習）

3. 日程（予定。参加者の様子を見て変更の可能性あり。前期14回、後期14回。）

日程	回	内容
4月13日	1	演習の概要と予定 ★課題 自分のテーマについてと、1章感想をメールで村瀬まで 4月19日締め切り <u>メールには名前と学生番号を書く</u> 次週準備、テキスト買う、ゼミ飲み、ゼミ報告書、忘れずに
4月20日	2	学術論文の発表：学会誌掲載の論文を要約すること
4月27日	3	テキスト2章 オンライン・データベースについて
5月4日	4	テキスト4章 文献検索法について（祝日授業日）
5月11日	5	テキスト5章 各自のホームページ作成
5月18日	6	テキスト6章 クロス集計とエラボレイションについて この回以降、テキストの発表後に、自分の仮説や先行研究について発表
5月25日	7	分析実習SPSS
6月1日	8	分析実習SPSS
6月8日	9	分析結果発表 平均値とクロス集計
6月15日	10	分析結果発表 平均値とクロス集計
6月22日	11	分析実習 重回帰分析
★ゼミ合宿		ゼミ論と卒論の構想発表予定
6月29日	12	分析実習 重回帰分析
7月6日	13	分析結果発表 重回帰分析
7月13日	14	分析実習 分散分析
8月4,5日		必要に応じて補講 ***** 夏期休業 *****
9月21日	15	テキスト その他
9月28日	16	テキスト その他
10月5日	17	テキスト その他
10月12日	18	テキスト その他
10月19日	19	分析実習 因子分析

10月26日	20	分析実習	因子分析
	*****	秋期休業	*****
11月09日	21	ゼミ論分析結果	中間発表会
11月16日	22	ゼミ論分析結果	中間発表会
	*****	祝日	*****
11月30日	23	テキスト	その他
12月7日	24	テキスト	その他
12月14日	25	学術論文の発表	
12月21日	26	学術論文の発表	
	*****	冬期休業	*****
1月11日	27	ゼミ論発表	仮説と分析結果
1月18日	28	ゼミ論発表	仮説と分析結果

注 発表者は資料を作成し人数分コピーすること。資料は必ずA4版で印刷。

6月下旬（予定）ゼミ合宿 ー全学年合同。3、4年のゼミ論、卒論構想発表会

テキストは必ず購入する。学術書は一般の本屋にはないので立教の書店で早めに注文。

4. 面会時間、ホームページとeメール

恒常的にeメールでの連絡をするので、立教メールから自分が使うメールに転送設定をすること。Vcampusの説明をよく読む。また、Vcampusの別名（エイリアス）設定をするとよい。立教大学のホームページからVcampusページを選び、解説をよく読む。なお以下の村瀬ゼミページに最新情報を掲載する。

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/murase>

演習内容に関して質問等があれば、演習中の質問も大歓迎しますが、下記までeメールを出しても良い。ただし、成績に関する質問や陳情はご遠慮ください。名前がないメールが多いのですが、必ず自分の名前を明記してください。

村瀬の研究室は12号館3階です。面会時間（Office hours: 木曜12:20-1:10）は研究室を開放しているので、質問などあれば自由に来てください。研究室のドアに、村瀬の都合の良い時間がはってあります。ふだんは研究・教育活動のため多忙なので、来訪の際はメールをしてからの方が行き違いが少ないでしょう。

5. 注意点

やる気のある人ならば誰でも歓迎です。最後までゼミをやり通し、卒論を書いてください。バイトやサークル等をゼミよりも優先することはないように。他学部を含め、他のさまざまな講義も積極的に受講して視野を広げ、数学や統計学の基礎訓練や社会情報処理、英語なども身につけるとよい。全カリの情報処理関連の科目もおすすめです。

毎日、新聞やテレビニュースを見て、様々な雑誌に目を通すなど、自分の世界を広げる努力をしてみてください。大学外の、現実の社会と接する努力をすることを、とくにおすすめします。

『社会学評論』や『理論と方法』、『社会学研究』、『社会心理学研究』、『ソシオロジ』などの学術雑誌の他、英文論文も積極的に読むこと。*American Sociological Review*, *American Journal of Sociology*, *American Political Science Review*などの過去数年分の目次を見て、論文本文をコピーするとよい。

調査実習の訓練は「社会調査演習」等の時間に行う。履修要項の社会調査士に関する記述を読み関連科目を取る。遅刻や無断欠席は厳禁。欠席は、必ず事前にメールで連絡する。

6. テキストと参考書の解説

テキストは各自で必ず購入する。参考文献も、自分が興味を持てるものはできる限り購入し、自宅で読みたいときにすぐ読める状態にしておく。

学生時代は贅沢はつつしむ一方、本代と食事代は惜しまないことをお勧めする。本代は知識を、食事代はあらゆる仕事の基礎となる体力を養うために必要。

以下、★印は村瀬の解説。

6.1. テキスト

白波瀬佐和子. 2006. 『変化する社会の不平等』東京大学出版会.

6.2. 参考書

赤川学. 2004. 『子供が減って何が悪い！』筑摩書房.

ボーンシュテット・ノーキ著＝海野道郎・中村隆監訳. 1990. 『社会統計学 — 社会調査のためのデータ分析入門』ハーベスト社.

文春新書編集部編. 2006. 『論争 格差社会』文藝春秋.

中央公論編集部編. 2001. 『論争・中流崩壊』中央公論新社.

★不平等に関する議論をよくまとめている。

ロバート＝C＝クリストファー. 1983. 『ジャパニーズ・マインド』講談社.

★外国人による日本社会論の中ではとてもよくできている。

土場学編. 2004. 『社会を“モデル”でみる — 数理社会学への招待』勁草書房.

原純輔. 1981. 「階層構造論」. 安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編. 『基礎社会学4：社会構造』東洋経済新報社.

原純輔・盛山和夫. 1999. 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会.

原純輔他編. 2000. 『日本の階層システム』1～6巻. 東京大学出版会.

★1995年S S M調査の分析結果をもとにした論文集。

原純輔編. 2002. 『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房.

橋本健二. 2003. 『階級・ジェンダー・再生産 — 現代資本主義社会の存続メカニズム』東信堂.

服部民夫・船津鶴代・鳥居高編. 2002. 『アジア中間層の生成と特質』アジア経済研究所.

林信吾. 2005. 『しのびよるネオ階級社会 — “イギリス化”する日本の格差』平凡社.

樋口美雄・財務省財務総合政策研究所. 2003. 『日本の所得格差と社会階層』日本評論社.

★日本の格差についての論文集だがやや保守的。

平野浩. 2007. 『変容する日本の社会と投票行動』木鐸社.

本田由紀. 2009. 『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.

今田高俊. 1989. 『社会階層と政治』東京大学出版会.

稲葉陽二. 2011. 『ソーシャル・キャピタル入門 — 孤立から絆へ』中公新書.

蒲島郁夫. 1988. 『政治参加』東京大学出版会.

鹿又伸夫. 1997. 「戦後日本における世代間移動の変動 (特集 社会階層の計量分析)」. 『行動計量学』24巻1号:20-27.

鹿又伸夫. 2001. 『機会と結果の不平等』ミネルヴァ書房.

荻谷剛彦. 2001. 『階層化日本と教育危機 — 不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』有信堂高文社.

小林淳一・木村邦博編著. 1991. 『考える社会学』ミネルヴァ書房.

★初学者が実証的な社会学を学ぶために、よくできた本。

小林淳一・木村邦博編著. 1997. 『数理の発想で見る社会』ナカニシヤ出版.

高坂健次・厚東洋輔編. 1998. 『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会.

★社会学理論の最新状況について解説。

三船毅. 2008. 『現代日本における政治参加意識の構造と変動』慶應義塾大学出版会.

三浦展. 2005. 『下流社会 — 新たな階層集団の出現』光文社新書.

★あとがきにあるようにデータは偏っている。分析も多くは不適切だが、おもしろい部分もある。

宮野勝. 1986. 「誤答効果と非回答バイアス：投票率を例として」. 『理論と方法』Vol.1 No.1:101-114、ハーベスト社.

宮川公男・大守隆編. 2004. 『ソーシャル・キャピタル — 現代経済社会のガバナンスの基礎』東洋経済新報社.

村上泰亮. 1984. 『新中間大衆の時代』中央公論社.

村瀬洋一. 2006. 「階級階層をめぐる社会学」宇都宮京子編『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房.

中谷美穂. 2005. 『日本における新しい市民意識：ニュー・ポリティカル・カルチャーの

- 台頭』慶應義塾大学出版会。
- 中野雅至. 2006. 『格差社会の結末 富裕層の傲慢・貧困層の怠慢』ソフトバンク新書.
- 直井優他編. 1990. 『現代日本の階層構造』第1～4巻. 東京大学出版会.
- 直井優・原純輔・小林甫編. 『リーディングス日本の社会学8：社会階層・社会移動』東京大学出版会.
- 大竹文雄. 2005. 『日本の不平等』日本経済新聞社.
★橋木に反論し日本は平等だとしている。
- 大竹文雄. 2010. 『日本の幸福度一格差・労働・家族』日本評論社.
- レイブ・マーチ著＝佐藤嘉倫・大澤定順・都築一治訳. 1991. 『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社.
- 佐藤俊樹. 『不平等社会日本 一さよなら総中流』中央公論新社.
- 佐藤嘉倫他編. 2011. 『現代の階層社会』1～3巻. 東京大学出版会.
★2005年SSM調査の分析結果をもとにした論文集。
- 盛山和夫他. 2005. 『「社会」への知 現代社会学の理論と方法 上下巻』勁草書房.
- 盛山和夫. 2011. 『経済成長は不可能なのか一少子化と財政難を克服する条件』中央公論新社.
- 盛山和夫他編. 2011. 『日本の社会階層とそのメカニズム 一不平等を問い直す』白桃書房.
★階層に関する最新の分析結果をまとめた論文集。
- 盛山和夫他. 2015. 『社会を数理で読み解く 一不平等とジレンマの構造』有斐閣.
- 数土直紀. 2010. 『日本人の階層意識』講談社.
- 数土直紀. 2013. 『信頼にいたらない世界 一権威主義から公正へ』勁草書房.
- 数土直紀. 2015. 『社会意識からみた日本 一階層意識の新次元』有斐閣.
- 数土直紀・今田高俊. 2005. 『数理社会学入門』勁草書房.
- 曾良中清司. 1983. 『権威主義的人間 一現代人の心にひそむファシズム』有斐閣.
★権威主義研究について分かりやすくまとめた良書。
- 橋木俊詔. 1998. 『日本の経済格差』岩波書店.
★所得や資産の格差を分かりやすく解説した新書。近年の日本社会は先進諸国の中でも格差が大きく、経済的に平等な社会とは言えないと主張している。
- 橋木俊詔. 2004. 『封印される不平等』東洋経済新報社.
- 橋木俊詔. 2006. 『格差社会 何が問題なのか』岩波書店.
- 田辺俊介. 2011. 『外国人へのまなざしと政治意識 一社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房.
- 谷口尚子. 2005. 『現代日本の投票行動』慶應義塾大学出版会.
- 谷岡一郎. 2000. 『「社会調査」のウソ 一リサーチ・リテラシーのすすめ』文芸春秋.
★世間一般の調査の問題点について分かりやすく解説した新書。
- 谷岡一郎, 仁田道夫, 岩井紀子編. 2008. 『日本人の意識と行動：日本版総合的社会調査 JGSSによる分析』東京大学出版会.
- 富永健一. 1979. 『日本の階層構造』東京大学出版会.
- 友野典男. 2006. 『行動経済学 一経済は「感情」で動いている』光文社新書.
- 筒井淳也他編. 2016. 『計量社会学入門 一社会をデータでよむ』世界思想社.
- Verba, Sidney. Norman H. Nie. Jae-on Kim. 1978. Participation and Political Equality: A Seven-Nation Comparison. Cambridge University Press.
＝三宅一郎・蒲島郁夫・小田健訳. 1981. 『政治参加と平等 一比較政治学的分析』東京大学出版会.
★社会的地位と政治参加や政治的影響力について、国際比較調査をもとに論じた名著。
- 和田英樹. 2006. 『「新中流」の誕生 一ポスト階層分化社会を探る』中公新書.
- 山口二郎. 2004. 『戦後政治の崩壊 一デモクラシーはどこへゆくか』岩波書店.
- 安田三郎. 1971. 『社会移動の研究』東京大学出版会.
★日本社会の開放性に関する代表的研究。
- 安田三郎・海野道郎. 1977. 『改訂2版 社会統計学』丸善.
- 安田三郎・原純輔. 1982. 『社会調査ハンドブック(第3版)』有斐閣. 2200円.
★同様のタイトルの本は多数あるが、これが内容的にもっとも整備されている。
- 寄本勝美. 2003. 『リサイクル社会への道』岩波新書.
- 与謝野有紀編. 2006. 『社会の見方、測り方 一計量社会学への招待』勁草書房.
- 和田秀樹. 2006. 『新中流の誕生』中央公論新社.
- 2005年SSM調査研究会. 2008. 『2005年SSM調査シリーズ』第1～15巻. 2005年SSM調査研究会.

7. 社会調査士資格について

調査と分析の能力のある人に対して資格を与える制度。単位を取るだけで資格取得できる。現実社会を調査し分析する能力が身につく、自分の訓練のためにはとても良い。履修

要項を見て、関連科目を積極的に履修する。

8. 卒業論文の作成

自分の興味関心にしたがってテーマを設定し卒業論文を作成する。論文作成によって、問題設定、調査、分析、考察の能力を身につける。3年次で得た能力をさらに発展させるとともに、1年間を通じた仕事の進め方を身につけること。

4月～5月 文献リスト作成、レビュー論文を読む（就職活動と平行して進めること。時間の使い方を工夫するのも大切な訓練。）

6月～7月 テーマと仮説を明確にし、卒業論文の大まかな目次を作る。8月中に、卒業論文構想発表会を行う。テーマをしばって先行研究をさらに読む。

8月～9月 調査実施、分析開始。調査をする場合、10月中には終わるように。

10月～12月 卒業論文本文執筆。★11月20日頃に卒論仮提出。12月下旬卒論提出。

9. 成績評価

成績は、発表の成果と討論の参加具合、課題によって決定する。討論に積極的に参加し、演習の発展に貢献した者、良い質問をした者は記録し高得点を付ける。発表内容が良かった者も、もちろん高評価となる。課題では自分独自の意見を書くことが大切。

10. 引用法と盗作について

引用と盗作は違うものである。引用は自由だが、必ず引用元を書かなくてはならない。レポートや論文作成の際に、引用元を書かずに引用すれば、盗作したことになってしまうので、十分に注意すること。最近、ネット上の文章をそのままコピーしてレポートで使う例も増えているが、これも完全なルール違反である。

他人の文章を、自分の文章であるかのように書くと盗作になるが、悪気はなくとも、引用元を明示せずに盗作になっているものが時々見られる。レポートや卒論等で、他人の文書を引用するときは、必ず引用部分を「」でくくり、引用の前に、引用元を書くこと。それ以外の形式で引用してはいけない。また、必ず「引用元」を明示すること。引用元を書かずに引用すると、盗作したことになるので、著作権法に反し、学問上、重大なルール違反となる。引用は自由だが、盗作してはいけない。

他人の文章を引用するときは、山田(2006: p.27)によれば、「○○」である、などのように、必ず引用元を先に書くこと。

★文献リストの形式 一著者名と発行年半角数字を必ず最初に書く。その後、「論文名」「本や雑誌名」と発行所を書くこと。論文名は一重かっこ、本や雑誌名は二重かっこを使う。著者名のアルファベット順にする。上記の参考文献や、テキスト巻末の文献リスト形式を参照。

11. ネット上の情報について

ネット上の情報や、ネット上の事典、ウィキペディア、各種ブログやネット上データは、基本的に「ガセネタ」も多く信憑性が低い。ウィキペディアなどネット情報は、ウソも自由に書き込めるし、個人が趣味で作った文章で正確なチェックはなく、信用できない情報が多い。また、すぐに消えてしまう情報も多いので、研究において使うべきではない。必要な情報は、本として出版されているものから引用すること。本として出版されたものは、編集者のチェックもあり信用度は高い。

また、ネット上にあるグラフを、そのままコピーして自分のレポートで使うことは、図やデザインの無断使用となるので著作権法違反である。自分でデータの数字を入手して、グラフを自分で作り直すこと。

多くの場合、最新のデータは本や統計資料となっているので、データを調べるときは、必ず図書館へ行くこと。データ検索をネットのみですませることは、絶対にしてはいけない。図書館の参考室には、各種の事典や図鑑、数十冊からなる百科事典もある。まず図書館で、きちんとした百科事典の索引を見て、使ってみると良い。信用できる統計データも、ネット上に少しはある。村瀬ゼミホームページの「文献や統計リンク集」などを見えること。調査データについては、SRDQ（社会調査データベース）や、SSJデータアーカイブなどを見えること。リンク集の中にある。

12. 文献検索について

立教内LANに接続されているパソコンであれば、無料で使えるオンラインデータベースが各種ある。図書館ホームページの解説をよく読むことが重要。学術雑誌内の目次情報や、新聞記事検索が可能（学内のみ）。まずは、以下を使いこなすとよい。

- ・ 国立国会図書館ホームページ 「雑誌記事索引」
- ・ サイニイ (CiNii 論文情報ナビゲータ 学術雑誌目次等)
- ・ SocINDEX with Full Text (立教図書館ホームページ「雑誌記事全文」より使える)

学会が出している学術雑誌を読むことは重要。新しいものはデータベースに入っていないので、紙の目次を見ること。日本社会学会が年4回出す雑誌は『社会学評論』である。『社会学研究』、『社会心理学研究』、『理論と方法』なども手にとってみる。

13. 村瀬の研究例 — 平等に関する意識の規定メカニズム

1) 目的

不平等に関する意識 — 規定要因を解明
 都市—農村による違い
 年齢による違い

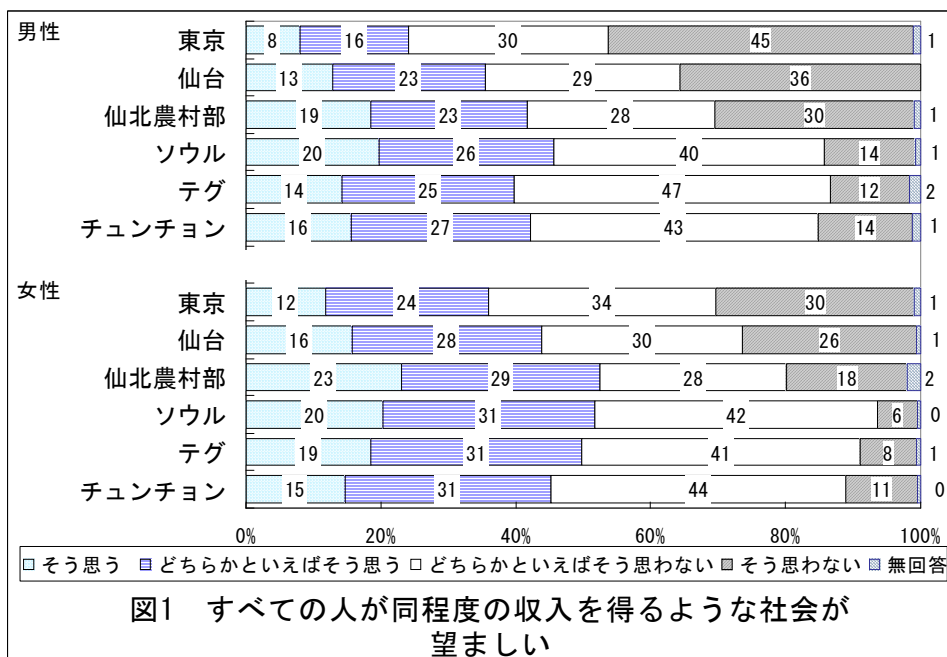
主な仮説

- ・ 高年齢 — 伝統的価値観が多い
- ・ 高学歴 — 実力主義的なので平等を否定
- ・ 農村部 — 伝統的価値観が多い

2) データ

東京、仙台、宮城県郡部（仙北郡部）
 母集団 20歳～70歳未満男女
 抽出法 選挙人名簿からの二段無作為抽出法
 計画標本数 個人を抽出単位として1500人×3
 回収率 仙台70% 仙北郡部64% 東京55%
 調査時期 仙台1997, 仙北1998, 東京1999年
 ソウル、テグ、チュンチョン（農村部含む）調査
 母集団 20歳以上男女
 抽出法 地図上での二段無作為抽出法
 計画標本数 個人を抽出単位として1600人×3
 回収率 62, 62, 63%
 調査時期 ソウル2003, テグ2004, 春川2007

3) 分析結果



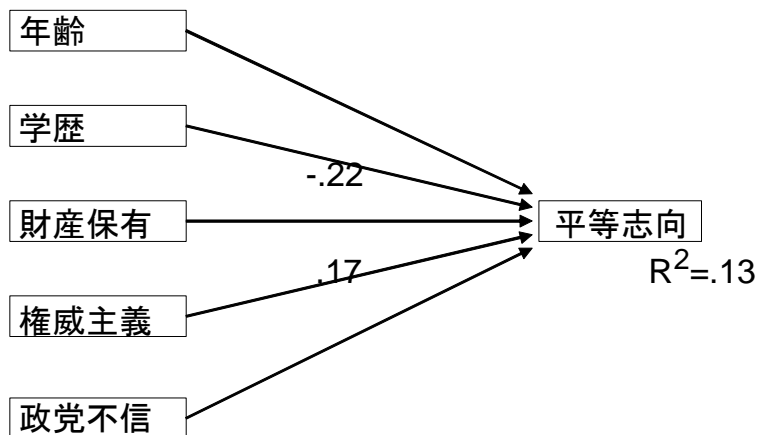
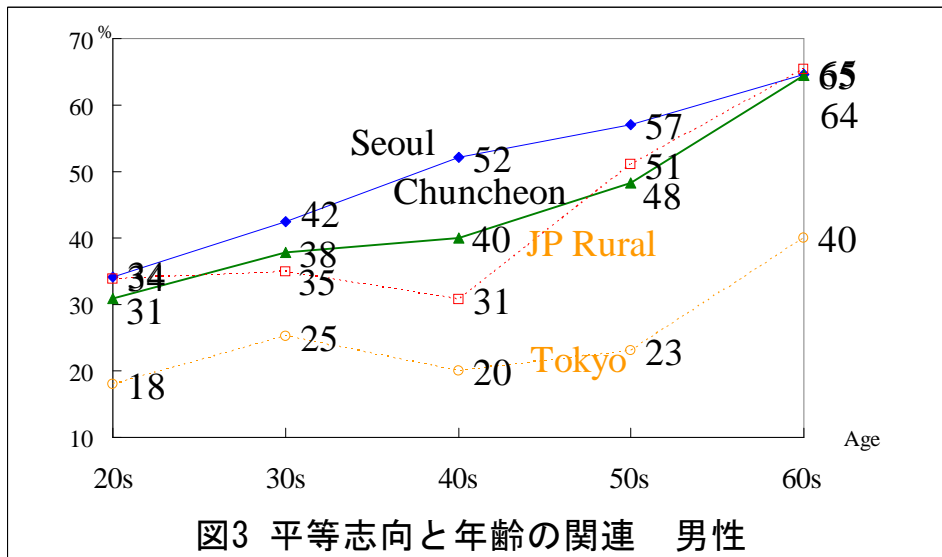
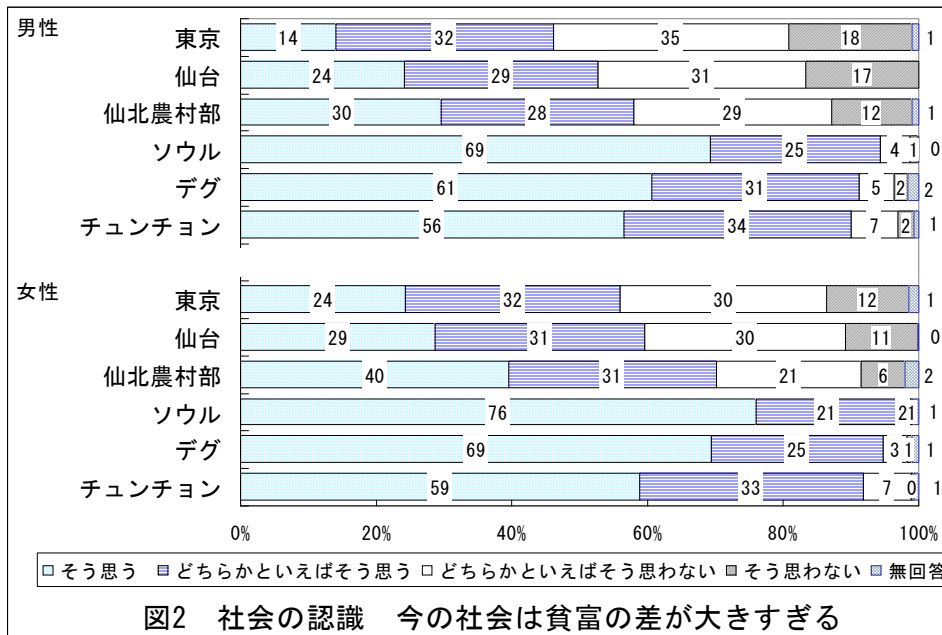
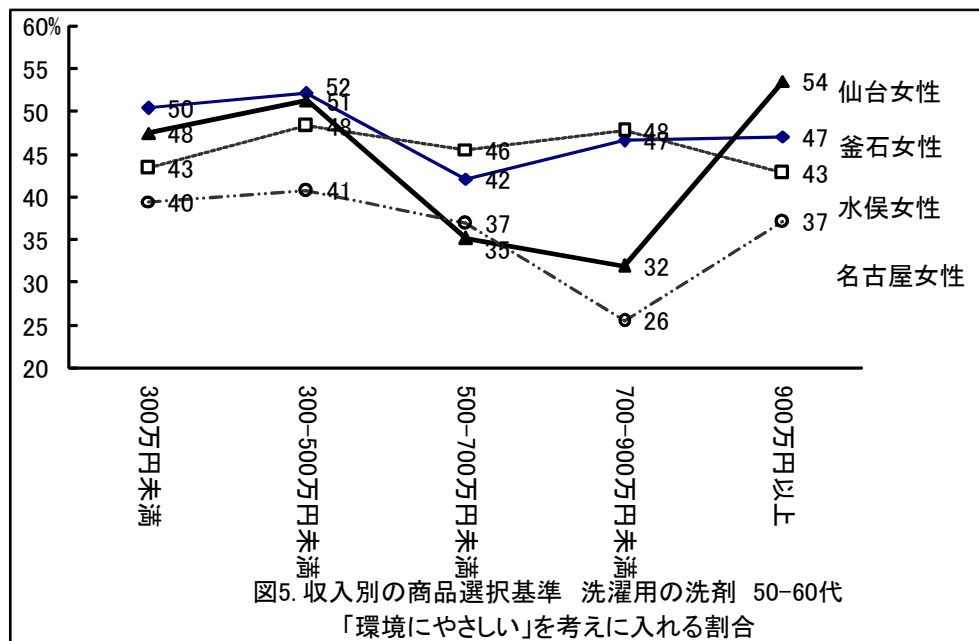


図4 平等志向の規定因 重回帰分析 東京男性



4) 結論

平等志向の規定因

- ・ 日本 学歴、権威主義
- ・ 韓国 年齢、財産保有

韓国の方が平等志向が強い。

平等志向と年齢は明確な関連がある。

国際比較のポイント

- ・ 格差の種類 貧富、都市度、地域、人種
特定層への富の集中
- ・ 産業化の程度
- ・ 地域の組織 近所つきあい、上下関係、親戚
- ・ 言論の自由、民主主義の歴史

14. 論文構成のポイント

論文は4つの部分からなる。必ず冒頭部で、目的と仮説を明確に書く。

村瀬ゼミホームページの卒論構成注意をよく見る。

目的と結論が対応していることが重要。

分析結果と結論は異なる。結果は事実、結論は自分の主張。

自分の主張が何かを明確に、かつ、結果と対応して書くこと。

その他の注意点

テキスト発表の際は、必ず、資料の最後に各自の批判意見を書くこと。単なる感想でなく内容への批判を書く。自分独自の考えを書いているものは高得点となる。